

エドワード・テイラーとエミリ・ディキンソン

クモを歌う詩人の魂

嶋田 美恵子

〔抄録〕

エドワード・テイラーは、17世紀イギリスでの非国教徒に対する迫害を逃れて植民地に渡り、信仰に生きた、カルヴァン主義的ピューリタンの牧師であった。彼はハエを捕らえるクモを見た時、そこに神学的意味を見出し、クモを地獄のクモと呼びサタンとして捉える。一方、ピューリタンの伝統が残る19世紀の、彼と同じニューイングランドで、エミリ・ディキンソンはクモを、世間から軽視されている天才芸術家として捉える。彼女は芸術作品をないがしろにする「キリスト教国」に対する批判をアイロニーで表現する。

本論文の目的は、エドワード・テイラーとエミリ・ディキンソンのクモの詩におけるクモの捉え方の違いが、両者のキリスト教観の相違に基づくものであることを明らかにすることにある。

キーワード 地獄, 芸術, ピューリタニズム, アイロニー

・序論

ラルフ・ウォルドー・エマソン (Ralph Waldo Emerson 1803-82) は、「自然は、いつでも、精神の色をおびている」と言い、「災害をうけて苦しんでいる人にとっては、我が家の炉に燃える火も、悲しみを蔵している」¹⁾と言った。また彼は、最高芸術は「魂の再現」²⁾であると言っている。エマソンの考えに従えば、詩人が詩の中に映した自然の姿は、詩人の精神、魂を表しているということになる。ここにおいては、作品と作者との関係が重要視される。

本論文は、エドワード・テイラー (Edward Taylor 1642?-1729) とエミリ・ディキンソン (Emily Dickinson 1830-86) のクモの詩に再現されたふたりの魂を探り、彼らが生きた時代背景、及び彼らの境遇との関係、すなわち作品と作者と世界との関係を考察することによって、彼らのキリスト教観の一側面が、詩にどのように表わされているのかを検証しようとするものである。

・地獄のクモ

イギリスにおけるピューリタン革命が戦争として始まったのは、1642年のことであった。エドワード・テイラーはちょうどその頃イングランド中央部のレスターシアで生まれた。1660年に王政が回復すると、1662年の統一法によって礼拝には国教祈祷書を用いることが定められ、1664年には宗教集会法が制定されて非国教会派の集会は禁じられた。テイラーは統一法にサインすることを拒絶し、教師の職を失った。また彼と彼の仲間は、集会所も説教もすることができなくなった。1668年に彼は迫害を逃れてイギリスを去り、ボストンに移住した。ハーバード大学卒業後は、マサチューセッツ湾岸植民地の辺境の町ウェストフィールドで会衆派の牧師となり、その地で生涯を終えた。

ピューリタン牧師エドワード・テイラーの代表作は、二部構成の200篇余りの詩から成る『瞑想詩』(*Preparatory Meditations*)であり、それは聖餐式における説教の教義について書かれたものである。彼は生前、一篇の詩も活字にして発表しようとはせず、子孫には詩の出版を禁じたと言われている。したがって、1937年にトマス・H・ジョンソン(Thomas H. Johnson)がイエール大学図書館で彼の原稿を見つけて出版する迄、彼は詩人として世に知られることはなかった。本論文で取り上げるクモの詩は、雨、ハエを捕らえるクモ、寒さに凍えるスズメバチ、家事、子供達の死、洪水など、或る「出来事」について書かれた八篇の詩のひとつである。これら自然界、或いは日常の出来事のすべてにおいて神の啓示や宗教的意味を見つけようとするのは、ピューリタンの習慣的な思考方法であった。彼と同時代の神学者コットン・マザー(Cotton Mather 1663-1728)の日記に表わされたそのような習慣を、『エドワード・テイラー』の著者ドナルド・E・スタンフォード(Donald E. Stanford)は少々揶揄して、「塀に小便をする犬にも意味」があることになるのだと言っている³⁾。テイラーには、ハエを捕らえるクモにも神学的に重大な意味があったのである。

エドワード・テイラーがクモを歌った詩「ハエを捕らえるクモについて」(“Upon a Spider Catching a Fly”)は、各連が五行の十連から成る詩である。最初に詩人は「悲しみを与え、毒を出す小さな妖精よ」とクモに呼びかけ、体の中から糸を吐いてハエを捕らえることは「お前の遊びなのか」、何のためにそのようなことをするのか、と問いかける。シェイクスピアの『リア王』では、「いたずら小僧がハエをおもしろ半分に殺すように、神々は我々をおもしろ半分に殺すのだ」⁴⁾、と運命の神々にもてあそばれていることを嘆いている場面がある。キリスト教では、信仰者が受ける苦しみは魂を純化し、信仰を強め、神へ近づくための試練として認識される。しかし、試練として受け止められなければ、いたずらに翻弄され、気まぐれに遊ばれているように思われることになる。詩人はクモがハエを捕らえることについて、その宗教的意味を考え出そうとしているのである。

第二、三、四連では、クモの巣に掛かったスズメバチについて述べられる。

網に掛かったスズメバチを、クモはすぐには襲わない。スズメバチは攻撃性が強く、しかも毒性の針を持っている。世界に約一万種いるスズメバチの中には、クモだけを捕食しているものがあり、また、大グモの運動をつかさどる神経中枢に毒針を突き刺して、五週間以上生きたまま麻痺状態にさせるスズメバチもいる⁵⁾。クモにとってスズメバチは、手ごわい、危険な恐ろしい対戦相手である。だからクモはスズメバチの針を恐れて「離れた所にいた」が、やがて「小さな指でスズメバチの背中を撫で、そして優しくたたいた」。また、スズメバチがあばれて「クモの巣をぼろぼろにするといけないから」、そのようにクモは「スズメバチを優しく扱った」のである。続く第五、六連では八エに戻り、第五連で詩人はスズメバチとは対照的な八エを「愚かな八エ」と呼ぶ。

Whereas the silly Fly,
Caught by its leg
Thou by the throate tookst hastily
And 'hinde the head
Bite Dead.

ところが愚かな八エは
足を捕えられた。
お前は急いでのどを絞め、
頭の後ろに噛みついて
殺した。

第六連では、八エは寿命が来る前に死ぬ。争いの際に死なないように持てる力で戦えと言う。次の第七、八連で、詩人は以上の模様を宗教的に解釈する。第七連ではクモを「地獄のクモ」と呼び、地獄のクモは内臓を働かせて糸を紡ぎ、網を編んで罨を設けるのであると言う。そして第八連では、人類を破滅させることがその目的であると述べる。

To tangle Adams race
In's stratigems
To their Destructions, spoil'd, made base
By venom things
Damn'd Sins.

アダムの子孫たちを罨に掛けることが

その策略です。

呪われたもの、永遠の断罪を受けた罪によって、
そこない卑しめて、彼らを
破滅させるのです。

聖書には「悪魔のわな」⁶⁾という言葉があるが、アダムは悪魔のわなに掛かった最初の「人」であった。アダムの神への不従順による最初の罪は、アダムの子孫すなわち人類に及ぶという「原罪」の思想が、ここで述べられている。それを詩人は「永遠の断罪を受けた罪」と呼び、「呪われたもの」と言っている。そのような人間の不忠実な行為による罪を救うために、イエス・キリストが地上に遣わされたのである、というのが聖書の思想である。そしてイエスは、荒野で悪魔の試みに会い、対決をして悪魔に打ち勝った。聖書は「悪魔に立ちむかいなさい」⁷⁾と言う。「この悪魔にむかい、信仰にかたく立って、抵抗しなさい」⁸⁾と言う。ところが、「愚かな」という形容詞をつけられたハエは、クモの網に掛かれれば全く無抵抗であり、瞬く間にクモに捕えられて殺される。ハエにはスズメバチのような強さもなければ、戦う意志もない。弱さの故に容易に誘惑の罠に掛かり、そして敵のなすがままである。「血を流すほどの抵抗」⁹⁾をしないのである。これらのことが、ハエが愚かであるという所以であると考えられる。

一方敵と戦い、敵を恐れさせる強いスズメバチは、「ピューリタンはこの世において神により悪魔と戦って勝利をえながら前進する『戦う聖徒』(fighting saint)なのである」¹⁰⁾という大木英夫氏の言葉の中の「戦う聖徒」のイメージと重なるものである。ドナルド・E・スタンフォードは、エドワード・テイラーにとって戦いのイメージは自然なことであったと述べている。それというのも、彼はピューリタン革命時の戦闘的なピューリタニズムの中で成人したからであり、また、ニューイングランドに移住後は、フィリップ王戦争¹¹⁾によって彼の教会建設が中断されたことがあった。「戦闘の教会」はピューリタンの中心的な考え方であったのだと言っている¹²⁾。実際に外なる敵と戦うピューリタンであったが、信仰者個人の内面においてもサタンと戦わなければならなかった。その時人が勝つために身につける武具は「光の武具」¹³⁾、すなわち信仰であると聖書は言う。悪との戦いは生涯続く。自分達の前に立ちだかる障害や誘惑は、すべてサタンによるものであるとするピューリタンの考えをもこの詩から捉えることができる。

エドワード・テイラーは「寒さに凍えるスズメバチについて」(“Upon a Wasp Chilled with Cold”)という詩において、スズメバチの中には神性の火花と、素晴らしい書物のような知識があると言い、スズメバチとそれを加護している神に感嘆している。しかし一般に人は、スズメバチのような知恵や強さがあるというよりも、ハエのように弱く愚かであろう。スズメバチのような人間より、ハエのような人間の方がはるかに多いであろう。だからこそ、テイラーはこの詩の題名を「スズメバチを捕えるクモについて」ではなく、「ハエを捕らえるクモについて」

としたに違いないと思われる。「われわれの弱さはこれほどのものであり、サタンの狂暴な力はこれほどのものである」¹⁴⁾とカルヴァン (John Calvin 1509-64) は言ったが、我々はハエのようなものであって、信仰を固く持たなければ、悪魔の支配下になって破滅させられるのである、という思想をこの詩から読み取ることができる。

敵と戦い、敵を恐れさせる強いスズメバチも、やがてはクモに殺される。このようなスズメバチは、迫害の苦しみの中で信仰に生命をかけ、血によって証しを表わした殉教者の生き方を喚起させる。この場合、敵は勝利したかに見える。しかし、敵の勝利はつかの間の勝利であって、最終的な勝利は殉教者のものである。それを信じる詩人は神に祈る。詩の第九連は神への祈りである。神の恵みによって、「私達」を縛っている糸が切れ、栄光の門と国が与えられることを祈る。そして最後の第十連では、神の恩寵によって糸が切れ、救われるならば、神の栄光を賛美するであろうと言う。

We'l Nightingale sing like
When perch on high
In Glories Cage, thy glory, bright,
And thankfully
For Joy.

私達はナイチンゲールのように
栄光の鳥かごの中の
高い所にとまって、主の輝く栄光を
喜びのために感謝して
歌うだろう。

クモの罠にかかり、容易にその糸に縛られてしまうハエのような弱い愚かな人間も、スズメバチのような殉教者も、共に信仰による復活の日にその糸は引きちぎられるであろう、と詩人は信じ、祈るのである。そして、信仰者にとって神を賛美し、その偉大さを述べることは神に近づくことであり、神の偉大な業の証人となって神に答えて感謝することは、信仰者の務めでもある。

『ヨハネの黙示録』には、世界の終末に新しいエルサレムが天から下り、神は「人の目から涙を全くぬぐいにとって下さる。もはや、死もなく、悲しみも、叫びも、痛みもない」¹⁵⁾と書かれている。エドワード・テイラーのこの詩でも、最後に勝利するのは悪魔ではない。そのために「私達」は神に祈り、神がなされるであろう恵みの行為の偉大さに対して、神をほめたたえ、感謝するのである。ここには、人間を救うのは、ただ神の恩寵のみであるというカルヴィニズ

ム思想が貫かれている。テイラーの詩は、原罪をになって生まれた人間が、この世の誘惑や敵、そしておのれ自身の罪と戦って敗北しても、神の恵みによりそれは勝利へと変わるということ、クモをサタンと想定してアレゴリーの形で述べている。ハエとズメバチは、サタンに出会った時の我々人間の二様の姿を示している。詩人は、サタンとの戦いにおける苦悩のさなかにおいても、神の恩寵を信じ、神を賛美し、感謝を捧げるのだと言っているのである。それが、テイラーが虫を捕えるクモを見て考えた宗教的意義であった。

すなわちこの詩は、アレゴリーによって人間とサタンとの戦いを表わし、神の恩寵による救いと、それに対する賛美と感謝とによって構成されている。『瞑想詩』が説教の準備としてその教義について書かれたように、これは詩の形式をとった一種の説教であると言することができるであろう。ナサリア・ライト (Nathalia Wright) は「エドワード・テイラーの詩における道德劇の伝統」(*The Morality Tradition in the Poetry of Edward Taylor*) の中で、テイラーの詩『神の決定』(*Gods Determinations*) と道德劇との共通点をプロット、形式、性格描写のそれぞれについて挙げている¹⁶⁾。道德劇とは、中世末にヨーロッパで流行した宗教寓意劇で、キリスト教の道徳を教化することを目的として上演されたものである。ピューリタンの文学には演劇はないが、テイラーの詩の目的とするところもまた、キリスト教の教化という点において、道德劇と共通しているということになる。ピューリタンにとって文学の効用とは、『アメリカ文学史』の中でハワード・C・ブラッシャーズ (Howard C. Brashers) が言うように「神の賛美と、神の道を教えること」¹⁷⁾ であり、テイラーのクモについて書かれたこの詩は、そのようなピューリタン文学の特徴を単純且つ明確に示している。

・クモと芸術家

エドワード・テイラーの詩作時代から約150年を経た頃、エミリ・ディキンソンは“spider”という単語を用いて六篇の詩を書いた。その中で、クモを見る詩人の精神が明快に表わされているのはトマス・H・ジョンソン版で1275番の詩であり、ジョンソンはその詩は1873年頃に書かれたとしている。

The Spider as an Artist
 Has never been employed —
 Though his surpassing Merit
 Is freely certified

By every Broom and Bridget
 Throughout a Christian Land —

Neglected Son of Genius

I take thee by the Hand —¹⁸⁾ (No.1275)

クモは芸術家として
一度も雇われたことがない
その卓越した真価は
キリスト教国至る所で、

簾を持ったすべての家政婦によって
惜しげなく証明されているけれども
世に顧みられない天才
私はお前の手を取ろう

詩人の目に映るクモは、天才的な芸術家である。エミリ・ディキンソンは天才芸術家クモが織るその巣の素晴らしさを、別の詩では「私の知っている最も美しい家」と呼び、「メクリンレースと綿毛の館」と呼ぶ¹⁹⁾。またそれは、「真珠の糸」で織られた「タペストリー」であり、クモの「光の大陸」であると言う²⁰⁾。そしてまた、夜中に「灯りもなく白い弧の上で」織られたクモの巣は、「貴婦人のひだ襟なのか、それとも地の精の経帷子なのか」と詩人は問う²¹⁾。しかし、クモが織り上げる芸術作品も朝になれば主婦や家政婦によって簾で払われてしまう。従ってクモは605番の詩では「無から無へと」作り上げているのだと言う。無から作り上げられたクモの芸術作品は、人間によって破壊され、無へと帰するのである。

詩人が「手を取ろう」と思っている相手のクモは、聖書では「小さいけれども、非常に賢いもの」のひとつとして挙げ、「やもりは手でつかまえられる」²²⁾とある。しかし日本語訳の「やもり」は、エミリ・ディキンソンが読んでいたKing James版では“spider”と表わされ、“The spider taketh hold with her hands,”²³⁾となっている。また、「天国は、良い真珠を捜している商人のようなものである」²⁴⁾と聖書にあるが、真珠は天上的なものを象徴し、聖なる新しいエルサレムの門は真珠で造られているという²⁵⁾。光は神の栄光を象徴的に表わし、「神は光」²⁶⁾である。ディキンソンが用いる単語、表現が聖書を源泉としていることは珍しいことではない。引用した上記の詩ではあからさまに“Christian”という語が使われ、キリスト教を意識していることを明確にしている。

見事な芸術作品を織り上げるクモが、詩人の比喻であることは容易に推察できる。詩人である「私」は素晴らしい詩を創作しているにもかかわらず、その真価を知っているのはごく身近な少数の人達だけであって、世間からは顧みられない。その意味で「私」はクモと同じ仲間である。「私」は同じ境遇にあるクモと握手をしよう、と言っていると考えられる。この詩のベル

ソナは、作者であるエミリ・ディキンソンと一致する。ディキンソンは、今では高く評価されている天才詩人であるが、彼女の詩が匿名で新聞に載せられた時には、編集者によって勝手に改ざんされた。また1862年に、彼女が批評家のトマス・W・ヒギンソン（Thomas W. Higginson）に送った詩は、彼には理解できず、出版できるものではないと判断された。それに対してディキンソンは出版なんて全く考えてもいないと言っているが²⁷⁾、それが彼女の本心であろうとみられる。1863年頃には「出版とは人の心を競売にかけること」²⁸⁾という詩を書いていた。

しかし、エミリ・ディキンソンが17歳から20歳の頃に彼女の父の事務所で働いていた法律書生ベンジャミン・F・ニュートン（Benjamin F. Newton 1821-53）は、早くから彼女の詩才を発見し、認めていた。彼はディキンソンが詩人になるまで生きていたいと言った、と彼女は上記の手紙の中で述べている。一方、詩人且つ小説家として活躍していたヘレン・ハント・ジャクソン（Helen Hunt Jackson 1830-85）が、ディキンソンを偉大な詩人と呼び²⁹⁾、詩の出版を勧めたのは1875年以降のことである。その時にはディキンソンにはもはや詩を出版しようという意図はなかった。

エミリ・ディキンソン自身は、自分の詩才を信じていたと思われる。彼女はトマス・W・ヒギンソンに詩の指導を求め、彼の「手術」³⁰⁾に対してお礼の言葉を述べ、更に指導を求めた。トマス・H・ジョンソンによると、彼女は約100篇の詩を彼に送ったという³¹⁾。そして、1862年7月には、ディキンソンは自分をヒギンソンの「弟子」³²⁾と呼び始めた。しかしながら、彼女は受けた指導によって自分の詩を根本的に変えることはなかった。彼女の詩の真価は人にはわからなくても、彼女自身は確信していたのである。「世に顧みられない天才」とは、彼女自身のことであった。

しかし、「私」が手を差し伸べる相手は、普通一般にはその気味悪さ故に嫌われている「クモ」である。自分の芸術作品が家政婦の簾によって破壊されるクモである。天才芸術家をそのように扱う社会に対する批判は、嫌われ者の虫けらであるクモを主人公にすることによって和らげられ、ユーモラスになっている。詩人がクモと同じ境遇であると暗示していることに対しては、自分を憐れんでいる気持ちは見られない。むしろこの詩に流れている精神は詩人の自負心であり、真価を認めない者に対するアイロニーである。

簾を持つ女は、クモの芸術作品に実際に接し、その真価をわかっているのだが、一瞬にしてそれを払い除けなければならない。その女は「キリスト教国」の家政婦である、と詩人は“Christian”という語を取って使っている。ここで前述した“Christian”という言葉が特別の意味を持ち、その考察が必要となる。

エミリ・ディキンソンの当時の“Christian”に対する見解は、彼女の手紙において述べられている。1275番の詩が書かれたとされる1873年と同じ年に、ディキンソンは従妹たちに手紙を書き、教会で起こっている「覚醒」に言及した。その中で、或る夫人が毎朝黒いクレープをまとい馬車に乗って走って行くのは、反キリスト教徒を脅迫するためだろうと言い、少なくともデ

ィキンソンにはそのような効果はあると言っている。しかし、その夫人の姿は、例えばドンキ・ホーテが水車に降参せよと迫っているようだと言っている³³⁾。この時の信仰復興を、ディキンソンは冷やかに見ていた。その夫人が「覚醒」に夢中になっている姿は、彼女の目には威嚇であり、押し付けがましく、また滑稽に映ったのである。彼女の家では1858年までには彼女以外の全員が信仰告白をして教会員になっていたが、過去においては彼女の周りの人達が信仰告白をする中で、彼女は悩み苦しんだ。しかし、43歳の頃に書いたこの手紙は、生涯信仰告白をすることのなかった彼女の、世間に対する不安を表わす一方で、彼女独自の宗教観がすでに揺るぎないものとして確立されていたことを示唆している。少なくとも彼女は、彼女が目にするキリスト教徒を批判し滑稽に思うほどに、彼女の精神は自由で独立していた。

クモの詩に戻れば、箒でクモの巣を払ってしまう家政婦には、クモの巣がいかに見事に織られているかは十分認められているはずである。心の中ではクモの芸術作品の価値を認めていても、おもてにはそれを認めない行為が現われる。本心と行為の間のずれは、社会的拘束に縛られていることを意味し、また虚偽や偽善をも意味する。彼女らの生きているキリスト教社会が彼女らの行動規範を定めているもののひとつである。クモの巣を払うことは掃除をする女の務めであり、他から要求されていることでもあり、実用的でないもの、邪魔なものはいくつかしまわなければならない。「キリスト教国」において実用的なものとは、キリスト教の教化に役立つものである。かつてピューリタンのコットン・マザーは、「詩の女神は売女となら変わる場所がない」と言い、詩は「あやしい魔力」を持っているから「魂の純潔をそこなわないように注意なさい」と言った³⁴⁾。詩は役に立たないどころか、「売女」であり「魔力」を持ち「魂の純潔」にとって危険なものであると考えたのである。17世紀にイギリスにおいてピューリタン革命が起こった時、それまで劇場で催されていた演劇はピューリタン精神には受け入れられず、ロンドンの劇場は閉鎖された。マサチューセッツ湾岸植民地において、コットン・マザーは詩に対して彼らと同様の考え方をしていたのである。

コットン・マザーが詩作及び詩を読むことについて忠告をしたのは1726年、エミリー・ディキンソンのクモの詩が書かれた時より約150年前のことであった。その後急速に発達した科学の思想や、理神論、啓蒙思潮などはアメリカの宗教に大きな影響を与えた。そして19世紀アメリカでは、合理主義的な反カルヴァン主義のユニテリアニズムが隆盛し、エマソンの超絶主義が広まった。前述した法律書生ベンジャミン・F・ニュートンはユニテリアンで、彼はエマソンの詩集をディキンソンに贈っている。また、ディキンソン自身、批評家のトマス・W・ヒギンソンの夫人にエマソンの『代表的人物』(Representative Men)を贈った³⁵⁾。彼女は1862年から20年余りにわたってヒギンソンに手紙を書いていたが、彼もユニテリアンの牧師をしていたという経歴を持っている。

ディキンソンの祖父は正統派キリスト教を守るために、その教育を目的のひとつとしたアマスト大学設立の際、自宅を売り渡すはめになるほどの貢献をした人であり、彼女自身厳格なキ

リスト教の教育を受け、その環境の中で育った。しかしながら、彼女が身近な人達、遠い友人、そして書物などを通して、その時代の思想の影響を免れていることはできなかった。一方ではニューイングランドの正統派キリスト教はたびたび信仰復興運動を繰り返しながら、そのキリスト教精神は脈々と受け継がれていった。ディキンソン自身が伝統的キリスト教精神と同時代の思想との両面を身につけていたのである。そしてそのいずれをも批判する精神を、彼女は持っていた。

クモの詩における「私」は、キリスト教に批判的である。批判的な意図を示すために、敢えて“Christian”という語を用いたと考えられる。詩人がここで批判的にアイロニーの目で見ている「キリスト教国」では、芸術が受け入れられていない。その「キリスト教国」を代表して芸術作品と関わっているのは、ここでは「家政婦」である。「家政婦」は詩の原文では“Bridget”と表わされている。『アメリカ人名事典』によると、“Bridget”とは、アイルランドでMaryの次に多い女性の名前で、19世紀半ばに多くのアイルランド人がアメリカに移住し、アイルランド人の「女中」にその名前が多かったことから、「女中」の代名詞として使われるようになったという³⁶⁾。すなわち“Bridget”とは、「女中」、「召使い」の意味であり、現代では「家政婦」ということになるであろう。エミリ・ディキンソンは605番の詩では、箒でクモの巣を払う人を「主婦」としている。

An Hour to rear supreme
 His Continents of Light —
 The dangle from the Housewife's Broom —
 His Boundaries — forgot — (No.605、第3連)

一時間で究極の
 光の大陸を築く
 それから自分の境界を忘れて
 主婦の箒からぶら下がる

先の1275番の詩では、詩人が主婦（housewife）或いは召使い（servant girl）或いはメイド（maid）という普通名詞ではなく、“Bridget”という元来は人名を表わす固有名詞であった語を用いたことは、箒（broom）という語の使用と共に、きわめて俗っぽい印象を読者に与える。詩人は「キリスト教国」を聖ではなく、俗のイメージで捉えていることになる。それとは対照的に、天才芸術家クモが織る巣は、605番の詩では「光りの大陸」と呼んだ。それは夜の薄明かりの中で光る白いクモの巣を知覚で捉えた描写にすぎないが、聖書では光源は神であり、「光」という語には聖なるイメージが伴う。

したがってクモの「光の大陸」からその外部への「境界」とは、ミルチャ・エリアーデ (Mircea Eliade) の言葉を借りれば、「聖なる空間」と「俗なる空間」³⁷⁾との境界であると考えることができる。詩人はクモと共に「聖なる空間」の中にいる。幕によって、完璧な「光の大陸」が破壊されると、クモは「聖なる空間」から「俗なる空間」へと入って行くのである。そこは「キリスト教国」である。すなわち、主婦や家政婦が幕を使う「俗なる空間」は、エミリー・ディキンソンの詩では「キリスト教国」である。これは芸術的創造を容認しない偏狭な宗教心に対するアイロニーと考えられる。単なる産業主義社会に対する批判であるならば、「キリスト教国」という言葉は必要ではない。そのアイロニーは詩人の自信と誇りから湧き出したものであろう。というのは、ここには詩人の信じるものに対する確固たる信念を感じせるものがあるからである。詩人の目には、周囲が俗なるものに見えたのである。

エミリー・ディキンソンの聖なる領域には、もはやピューリタンの絶対神に対する自己否定の精神は見られない。しかし、自己を高らかに歌ったウォールト・ホイットマン (Walt Whitman 1819-92) ほどの自己拡大の精神も見られない。「私」が手を差し伸べようとしている仲間は、クモである。詩人がクモと同じ仲間であるということによって、自分を卑下しているかに思わせる。高慢と対照をなす卑下、すなわち自分を低くすることは、聖書では身につけるべき徳のひとつとされている。神は「へりくだる者に恵みを賜」³⁸⁾い、神によって「自分を低くする者は高くされ」³⁹⁾、神の栄光にあずかるのである。自分をクモと同一視することは、更に自分を低くしてカルヴァン主義的な神の被造物である「虫のような人の子」⁴⁰⁾の立場に自らを置いているようである。まるでここにはピューリタンの思想が貫かれているかに思われる。

しかし、これは詩人の策略であろう。キリスト教徒の徳のひとつである謙遜の精神を提示し、自らがその精神に立つことによって、「キリスト教国」の人達に対する批判はアイロニーとなる。また、相手を批判する場合には、相手の上から或いは真っ向から批判するのではなく、あたかも自分が惨めな立場にあるかの如くに自分を卑下して批判することによって、前述したようにその批判は婉曲になり、アイロニカルになり、ユーモラスにさえなる。その策略を用いた詩人自身は聖なる領域にいることを、詩人は自覚しているのである。そのようにディキンソンは波風を立てず効果的な方法で、正統的ピューリタン教会を批判したのである。

・結論

エドワード・テイラーの詩における「登場人物」は、クモ、ハエ、スズメバチ、神、「私達」であった。そしてクモはサタンであり、「私達」は永遠の断罪を受けたアダムの子孫であった。ハエとスズメバチは、サタンの罠に掛かった時の人間の二様の姿を示した。すなわち詩人は、クモに捕えられて殺される虫の立場に立ってクモを見たのである。そして、神の恩寵による以外に救済はないと信じ、神に祈り、神の栄光を称えたのである。それは17世紀の厳格なピュー

リタン、テイラー牧師の説教とも言える詩であった。

エミリ・ディキンソンの詩における「登場人物」は、クモと家政婦と「私」であった。クモは世間から顧みられない天才芸術家であり、「キリスト教国」の家政婦は、クモの芸術の真価を知りつつもそれを見捨てるのが常である。そのようなクモに詩人は自分の境遇を重ね合わせ、クモに対して同じ仲間として親しみを感じ、手を差し伸べようとしている。そして詩人は「キリスト教国」での天才芸術家の扱い方に対するアイロニーを、自嘲しているかに見せかけて歌った。ディキンソンには「キリスト教国」が俗なるものに思われるほどであった。自負心が内に秘められ、そこにはディキンソンの独立した精神があった。

エドワード・テイラーが地獄のクモの罟と見たクモの巣を、エミリ・ディキンソンは素晴らしい芸術作品としてほめ称えている。一世紀半の年月を経て、全く変化のないクモとその巣は、それを見る詩人の魂によって、かくも異なったイメージで再現されたのである。一匹のクモを異なって見る二人の詩人の間には、キリスト教観の相違があった。

【注】

- 1) Ralph W. Emerson著 斎藤光訳『エマソン選集 1 自然について』p.51。(日本教文社 1967)
- 2) , 斎藤光訳『エマソン選集 5 美について』p.9。(日本教文社 1969)
- 3) Donald E. Stanford, Edward Taylor. (University of Minnesota Press, 1965) p.21.
- 4) W. J. Craig ed., "King Lear" The Complete Works of Shakespeare. (Oxford University Press, 1965) IV, i, ll.36-37.
- 5) Compton's Pictured Encyclopedia and Fact-Index. Vol.15. (Chicago: F. E. Compton & Company, 1948) pp.33-35.
- 6) 新約聖書『テモテへの第一の手紙』第3章7節(日本聖書協会 1961)
- 7) Ibid., 『ヤコブの手紙』第4章7節。
- 8) Ibid., 『ペテロの第一の手紙』第5章9節。
- 9) Ibid., 『ヘブル人への手紙』第12章4節。
- 10) 大木英夫著『ピューリタニズムの倫理思想：近代化とプロテスタント倫理の関係』p.202。(新教出版社 1969)
- 11) フィリップ王戦争(1675-76)ニューイングランドの植民地全体を巻き込んだ、白人とインディアン最大の戦争。キリスト教に改宗したササモンというインディアンが密告の容疑をかけられて殺されたことが戦争のきっかけとなった。その容疑とは、ワンパノアッグ族の大酋長フィリップが白人に対して戦争準備をしている、とプリマス植民地の総督に密告したというものである。フィリップ王の死によって戦争は終結した。
- 12) Donald E. Stanford, op. cit., p.28.
- 13) 新約聖書『ローマ人へ手紙』第13章12節。

- 14) Johannis Calvini著 渡辺信夫訳『カルヴァン・キリスト教綱要』p.207。(新教出版社1969)
- 15) 新約聖書『ヨハネの黙示録』第21章4節。
- 16) Nathalia Wright, "The Morality Tradition in the Poetry of Edward Taylor," *American Literature*, 18. March 1946. (Kraus Reprint Ltd. 1966) pp.1-17.
- 17) Howard C. Brashers著 刈田元司訳『アメリカ文学史』p.12。(八潮出版社 1973)
- 18) Thomas H. Johnson ed., The Poems of Emily Dickinson. (Harvard Univ. Press, 1965) No.1275.
- 19) Ibid., No.1423.
- 20) Ibid., No.605.
- 21) Ibid., No.1138.
- 22) 旧約聖書『箴言』第30章24 - 28節。
- 23) The Holy Bible: King James Version. (Ballantine Books, 1991) p.606.
- 24) 新約聖書『マタイによる福音書』第13章14節。
- 25) 新約聖書『ヨハネの黙示録』第21章21節。
- 26) 新約聖書『ヨハネの第一の手紙』第1章5節。
- 27) Thomas H. Johnson, ed., The Letters of Emily Dickinson. (Harvard University Press, 1986) No.265.
- 28) Thomas H. Johnson ed., The Poems of Emily Dickinson. (Harvard Univ. Press, 1965) No.709.
- 29) Thomas H. Johnson ed., op. cit., No.444a.
- 30) Ibid., No.261.
- 31) Thomas H. Johnson, Emily Dickinson: An Interpretive Biography. (Atheneum, 1980) p.133.
- 32) Thomas H. Johnson, ed., The Letters of Emily Dickinson. (Harvard University Press, 1986) No.268.
- 33) Ibid., No.389.
- 34) 大下尚一編『講座・アメリカの文化：ピューリタニズムとアメリカ』p.192-3 (南雲堂 1969)
- 35) Thomas H. Johnson, ed., The Letters of Emily Dickinson. (Harvard University Press, 1986) pp.569-570.
- 36) George R. Stewart著 木村康男訳『アメリカ人名事典』(北星堂書店 1983)
- 37) Mircea Eliade著 風間敏夫訳『聖と俗』p.14 (法政大学出版局 1985)
- 38) 新約聖書『ペテロの第一の手紙』第5章5節。
- 39) 新約聖書『マタイによる福音書』第23章12節。
- 40) 新約聖書『ヨブ記』第25章6節。

(しまだ みえこ 文学研究科英米文学専攻博士後期課程)

(指導教授：萱嶋 八郎教授)

2001年10月17日受理